

本人もご家族も気づかないものです。

もともと良く見えていたものがぼんやりとしか見えなくなってきたら「最近視力が下がったな」と気づくでしょうが、それはおとなの話。こどもの視力は新生児から3歳ごろにかけて急激に発達し、6歳前後で完成します。発達が遅かったり、片目の視力に問題があっても、それなりに見えているので、本人は不自由を感じないものなのです。

こどもの50人に
1人は弱視です。

3歳児の弱視は
見逃されがち。



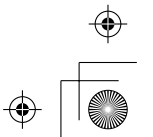
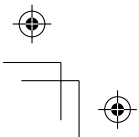
弱視とは、
視力の発達が
途中で
止まること。

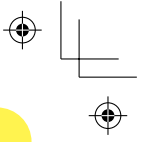
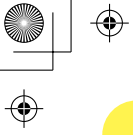
目だけでなく、
脳の発達も必要です。

視力とは、目だけの能力ではありません。目から受け取った映像の情報を、脳が処理する能力とセットです。脳は目から来る情報に刺激を受けて発達します。ピントが合った映像が脳に送られないと、脳の見る機能は十分に発達しません。



3歳児健康診査の結果、弱視の可能性がります。
速やかに眼科を受診しましょう。





弱視の治療って何するの？

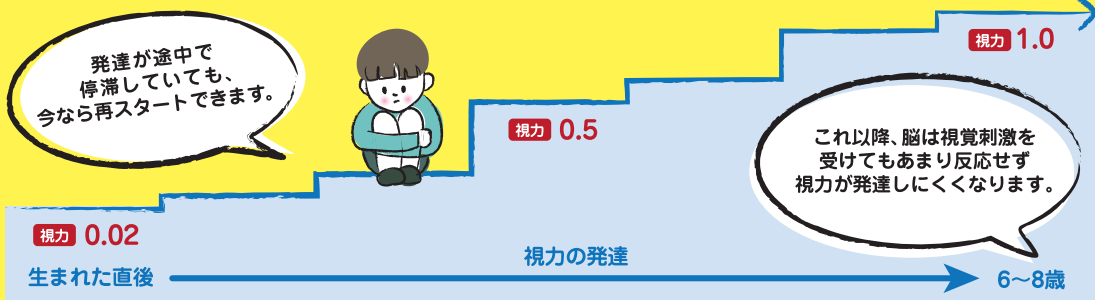
異常を放置すると、脳の見る機能の発達も止まってしまいます。
弱視のほとんどは、治療用めがねをかけてピントが合った状態にすることで、脳が刺激され、視力が発達していきます。
3歳で治療を開始したこどもの多くが、小学校入学までにめがねを常用すれば十分な視力を得ています。

3歳から治療することを、
強くおすすめする理由。



治療にはタイムリミットがあります

成長するにつれて視力の発達はスローダウンして6~8歳で完了します。治療開始のタイミングを逃すと、思うように効果が上がらず、めがねやコンタクトレンズを使っても生涯十分な視力を得られないことがあります。



(自治体ごとに改変が可能なスペース)
問い合わせ窓口や精密検査費用 (自治体からの助成について)
精密検査機関リストの掲載先など、ご自由にご記載ください。

